



羅針盤

鶴田 大輔
Daisuke Tsuruta



大阪市立大学大学院医学研究科 皮膚病態学 教授

「似たもの同士」のDNAを継承して

久しぶりに「似たもの同士」特集である。そしてそのなかでも「水疱」にターゲットを絞った特集を企画した。本誌における「似たもの同士」の企画は元々、杏林大学名誉教授の塩原哲夫博士により2005～2007年になされた。2006年の「羅針盤」において塩原博士は、「思い込みを排除して虚心坦懐に皮疹を観察すること」を「似たもの同士」の隠れた意図として述べられている。

現代は高度な情報社会に属するために、さまざまなノイズを伴う情報を生み出しており、われわれはそのノイズに混乱させられていることは否めない。元来皮膚科学は、皮疹の形態学的観察を基礎に始まった学問である。さまざまな検査法の発達、情報社会により生み出されたノイズによって、皮膚科学の基本中の基本である視診がともすればおろそかになっているかもしれない。内科学においても、エコーもCTもMRIもなかった時代は、問診、視診、打診、聴診により診断していたと思われる。しかしながら、現代医学の発達に伴い、打診や聴診がおろそかになっていることは誰も否定できないであろう。皮膚科もまたしかり。長島氏、北村氏、遠山氏、太藤氏、土肥氏など人名のついた皮膚疾患を、視診により見極めることのできた時代の医師と比較し、やはり視診の能力は、われわれ現代の皮膚科医において衰えている可能性はないだろうか？

これに関して私が思い出すエピソードとして、宮崎大学名誉教授 井上勝平先生の臨床講義がある。井上教授

は私がまだ研修医のころ、大阪市立大学の非常勤講師をされており、年に一度われわれの教室に講義に来られていた。そのときに、「学問のあらゆる基本は似たものの対比である」ということを強調しておられた。井上教授は2つの皮膚疾患の違いを徹底的に考え、それをノートに“A vs B”という形でまとめあげていくことをわれわれに伝授された。

今回の「似たもの同士」の企画は、まさにこのトレーニングにうってつけであると考えられる。今回の特集記事では、それぞれの領域のエキスパートが論点を丁寧にまとめてくださっている。これを自分自身の徹底的な観察眼で詳細に比較検討し、自分の言葉で違いをまとめあげ、それを脳裏に焼き付けることこそが、視診の良いトレーニングになると考える。

「水疱」は、たかが「水ぶくれ」である。やはり、ちょっとした熱傷や虫刺により生じることが圧倒的であろう。しかしながら、命に関わる水疱、生涯多くの人を悩ませ続ける水疱が、なかには存在する。これをいかに初診から鑑別し、確定診断に至らしめるのかのトレーニングに、本特集は最適である。確かに、先人の観察眼は凄かった。しかし、今やわれわれは分子生物学的手法、病理学的手法、微細形態学的手法、生理学的手法を身につけた。そのうえでもう一度基本に戻るならば、先達が見ることができなかった「美しい」皮膚科の世界を、現代のわれわれは手にすることができるのではなかろうか。